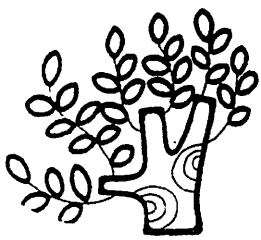
ひまわりからのメッセージ

31号
2013.10.8
西濃圏域
発達障がい支援センター
ひまわり
発行人：中野たみ子

レストランの光景



つい先日、レストランで食事をしました。このところ忙しくて、昼食といえば車の中でおにぎりを頬ばったり、サンドイッチを食べたりしていましたので、本当に久しぶりにゆっくりと椅子に座って食事をしました。

見ると、周りは小さい子を連れた母と祖母らしき人が何組かおられました。そうか、世の若いお母さんたちは、こうしてランチをとっておられるのだなあと、ながめていたのですが、妙なことに気づきました。子どもたちの声が聞こえてこないし、お母さんたちが子どもに話しかける声も余り聞こえません。何と大人しい子だろうというよりも、会話のないことが気になったのです。そのうち、子どもの一人がトコトコと歩いて、他のお客さんの席の近くまでやってきましたが お母さんは近えに来ません。店の人が子どもを見ていてくれるように保護者に伝えると、祖母らしい人が連れ戻しましたが、その時もことばのやりとりは聞こえませんでした。

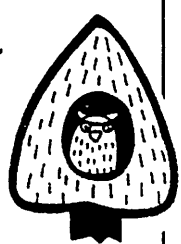
この光景をどう見るのか、幸せな日常ととらえるのか、あるいは……？

店を出るとき、バイバイと手を振る私に手を振り返してくれた女の子、そして前述の男の子は、キョトンと私を見つめているだけでした。

親と子ということを、最近特に考えさせられています。ことばのキャッチボールが少なくなって、子どもの表現力の弱さが気になるのは、私だけなのでしょうか……。

その夜、帰宅した私は庭の金木犀の香りにふっと気づきました。季節の変化をせめて五感で感じ取っていたいと願いつつ、近頃は、自分の感性の鈍さも思い知らされています。虫の音も聞こえていますのに……。

知能検査と個人内差が教えてくれること



私は、このところ、ずっと知能検査をしています。四月から今まで、すでに百五〇名をゆうに越えてしまっているでしょう。

私は、昔は心理検査が大きらいでした。特にビネー検査はずっと毛嫌いしてきました。皆さんもご存知のように知能検査というとまず頭に浮かぶのがビネー式検査です。六歳の子が六歳の精神年令であれば、一〇〇というのがIQ（知能指数）の値です。ビネーが開発したこの検査は、日本に入ってきて、鈴木辰見、田中という三人によって日本版が作られて、それぞれに鈴木ビネー、辰見ビネー、田中ビネーとよばれています。一番有名なのは田中ビネーですが、どの検査も一つの値で出てきます。

若い頃の私は、IQ七六とIQ七五とどこがちがうの、そんなことで人の知能が測られて、選り分けられるのは許せないと思っていたのです。

けれども、ウェクスラーの開発した検査に出合って救われた気がしたのです。検査することで子どもの個人内差を知り、子どもが困っているのは、ここなのだと知って支援の手だてを考えることができる、子どもたちの選り分けに使うのでなく、子ども自身にプラスになるように返してあげることができるということに、望みをたくしてみようと思いました。

発達障がいといわれる子どもたちが多くなってきていると感じられるようになり、子どもたちの感覚や認知のアンバランスさが目立ってきたこともあります。子どもたちの困っているところが何に起因しているのか、その弱さに（もちろん強みにも）気づいてあげることで、次の手だてが考えられるとしたら、すごいことではないでしょうか。

検査には、一時間以上かかりますが、その結果を分析して、保育園や幼稚園の先生と保護者の方に話をし、これからの支援、手だてを探っていくという

作業は、何か子どもたちの今後に役立っていくのではないかと思えて、私自身に〝はりあい〟が持てるのです。

例えば、ことばはよく知っていて知識もあり、ことばで言われたことから状況をイメージすることもできるのに、目で見て部分から全体をイメージすることが苦手だし、位置関係もよくわかっていないというお子さんの場合、リズムをやろうとすると拒否するし、製作などやりたがらず、勝手なことをしているといったことが起こります。先生方は、嫌なことはやろうとしないわがままな子という目で見られるかもしれませんが、実はそうではないのです。頭でイメージできる子なので、自分としては「こうなるはず」と思っているのに、体の図式ができていないので、どの様にしたらいいのか、どの様に体や手足を動かせばいいのかわからない、でもできない自分を知られたくないし、できない自分が許せなくて「イヤー!!」と、言うことになったわけです。

それだったら、どんなふうに体を動かせばいいのか教えてもらえばいいわけです。プライドが高いお子さんであれば、内緒で教えてもらえるといいですね。

逆に、目で見ると理解できるのに、ことばを聞いただけではよくわからない、ことばからイメージできないという子もいます。このごろよく使われる視覚支援が有効だということになります。けれども、いくつかの問題があります。まずその子の物のとらえ方です。いろいろな物の中から必要な物を選びとって見る、あるいは書き写すということができる子かどうかという点です。図と地の関係と言いますが、それが苦手な子だと先生は視覚支援のつもりで色々なものを呈示して下さっているのだけれど、それは用をなしていない場合だってあるわけです。背景にある物と、見るべき物との関係については、ぜひ見直したいことです。

又、宿題にとりかかれない子の中には、二十問が一度に目の中にとび込んでくると感じる子がいるのです。だから見ただけで嫌になってしまって、はじめからやろうとしなくなるわけです。それが分かれば宿題の与え方を工夫して、例えばコピーをして五問ずつに区切ってみるのも可にしてもらえばいいです

よね。

ただ、知能指数がまだまだ一人歩きをしている感じがします。ウィスクⅢという検査では、例えば群指数で言語理解と注意記憶の値が六十代で、処理速度や知覚統合が八十代であると、全IQは、七十代になります。言語理解というのは、ことばを聞いて、そのことばからイメージを広げていく力、いわゆる言語推理という面を含んでいますから、ここの部分の弱いお子さんには、一斉指示がなかなか通りにくいものです。また注意記憶というのは、検査者の言ったことを復唱する、つまり短期記憶です。一対一の関係の中で言われたことでも記憶できないお子さんが全体で言われたことを憶えておくのは、かなり大変です。しかも、そうやって記憶したことを頭の中で組み立て直す作業（ワーキングメモリーとか作動記憶と言います）が苦手であると、学習の困り感は増してしまいます。友だちの行動をまねて、一テンポか二テンポ遅れて行動を起こしていても、園生活の中では何とかやっていけるでしょうが、学校では苦労します。友だちのノートを写して、出来たという顔をしている子どもたちにも出会いますが、基礎から積み上がっていかないなあと心配になるのです。

でも、私の心配をよそに「この子はIQがこの位だから通常でいけますよ、大丈夫です！」と言われてしまうと、この人は、この子のこれから先のことも考えて言ってるのだろうか・一時的にお母さんを安心させるために言っているのだろうか・それとも自分の保身のためだろうか……と考えてしまいます。

検査結果を伝えた時に泣かれた方もありました。私を冷たい人間だと思われたかもしれません。でも、ご両親は、自分のお子さんの困り感も強みも、それが例え検査という一側面であっても、知っておく責任と義務があります。お子さんが将来自立していくために何をしていくべきなのか、私は一緒に考えていける人間でありたいと思っています。ただ、数値で判断していこうとしているのでは決してないのです。

悩み相談室

お小遣いの使い方学習

先日、私の携帯にメールが入りました。お金のことです。高校生になって、お小遣いは、その日のうちに使ってしまうし、黙ってお金を持ち出すし、どうすればいいでしょうという質問です。

実は、お金の使い方というのは、高校生になってから考えるのでは遅すぎます。お金をどのように使うかということは、小学生のうちから考えていきたいものです。そう言っている私も決して上手ではなく、つい衝動買いをしてしまいますが、将来の自立のために、子どもたちにつけておきたい力です。

お小遣い帳をつけるということ、まず考えますが最初は、週単位や月単位では無理なのです。子どもたちには、まず一日単位から始めましょう。これは、少年院の所長をしておられた小栗正幸先生から教えていただいたことです。

週単位や月単位で給与のように小づかいを与えてしまうと、失敗しやすくなるということは、よくあることですが、これは、子どもたちが、その期間内の小づかい管理に見通しがもてず、もらった日にすぐに使ってしまったりするからです。だから日給制にしてみます。毎日の日給制にすると、もちろん、子どもは、それを一度に使ってしまっても良いのですが、全部使わずに、少し残すことができたら、それは、すごいことです。残したことを多いにほめ、花丸シールでも貼ってもらえばよけい良いですね。そしてシールが〇〇個たまったら……と、約束しておくと、もっといいでしょう。

もらったら、その日のうちに全部使ってしまっていた子が、そうして少しずつ残せるようになるということは、自分の気持ちに折り合いがつけられるようになったことでもあります。日単位から週単位、月単位へと変えていけるといいのですが、もちろん、そういう子ばかりではありません。ずっと一日単位で続けている子もきっといますよね！

お年玉や誕生祝など習慣になっていますか？クリスマスもそうですが、いつもよりかなりたくさんのお金が手に入ったとき、小づかい帳をつけさせてみましょう。その時も全部使わずに残せたらいいですね。計算の仕方など余りとやかく言わずに、書けたことをほめ、残せたことをほめていきましょう。

子どもたちが大きくなって自立していくためには、どうしても金銭管理は欠かせません。いつもお母さんが子どもが欲しいだけ渡していては駄目なのです。お金は、いつでも湯水のようにあふれ出てくると子どもたちは考えてしまっているかもしれませんから……。

先般の相談のお子さんは、小遣い管理がどうしてもうまくいかず、お母さんが小遣いをストップしたところ、家のお金を持ち出すようになってしまったということでした。大きくなると、金銭がらみの問題や異性がらみの問題が多くなってきます。学校での学習以外に、その子が一人で生きていくために必要な社会的ルールを学ばせていかなければならなくなってくるわけです。

幼少時、「うちの子は、発達障がいなんかじゃない！」「勉強さえできればいい！」と思っておられたかもしれませんが、発達障がいをご両親が理解して育てていくことが実は、一番大切なことではないでしょうか。育てにくさもあり、本人の困り感もあるのに、どうしても勉強ということに私たちもお母さんたちも目が行ってしまうということがあるのではないでしょうか……？

お知らせ

- 11月12日(火) 午後1時～3時半 情報工房5階 小栗正幸先生講演会
- 12月14日(土) 午前10時～ ソフトピアジャパン10階 谷口光之先生 ビジョントレーニング講演会

※皆さん、ぜひご参加下さい。

11月の親の会は「いじめについて」考えませんか。
12日(火) 午前9時30分～